6カ月というところで、本当に手探り、試行錯誤でやっているんですけれど、事業企画係が地域ケアを担当しているので、そこを通しての地域のニーズが見えてきます。磯子の場合、地域ケアをシステム的に積み上げて行く時に、やっぱり一番基本にしているのが、ひとり暮らし等の定期訪問事業ですね。定期訪問事業の中で、実際に動いてくださっている民生委員さんとか保健活動推進員さん、友愛活動推進員さんとか、ボランティアの方たちとか、地区社会福祉協議会を中心にしたいろんな団体、グループ、そういう動きをしている方と連携しながら、地域の方々の活動と共に、個々の問題を集積しています。それらには共通点があって、地域として課題解決しなければいけない問題として上がってきますので、その積み上げ作業を今やっている段階です。その中で、地域の問題というのが、本当に連合町内会単位ぐらいで、全然違うということがわかってきます。この地域では問題になっていることが、こっちでは全然問題になっていないなど区の中でも地域の多様性がすごくよく見えてくる。

❶―地域をトータルに捉えるコミュニティ・カンファレンス

【横山】　今の話に関連して言うと、社会福祉の分野でひとつのむずかしいケースを処遇するのにも、ケースワーカー、保健師などの専門家による「ケースカンファレンス」ってあるでしょう。これにならって、コミュニティ（地域）カンファレンスみたいなことを、区をあげてやったらどうかと考えています。ここの事例でいえば、泉区の中川地区のコミュニティを対象にして、福祉保健センターだけではなくて、地域振興課とか区政推進課とかも一緒に、福祉だけでなくまちづくりも含めて、この地域をどうするかを議論するための場や地域の情報を整理し、共有化するための仕組みを創っていくことが、重要になると思っています。

【大塚】　今のコミュニティカンファレンスに通じるかもしれない例を言います。

鶴見区の寺尾地域は、連合町内会二つ分の地区で、都市計画マスタープラン区プランの地域別懇談会のエリアとも重なっています。昭和30年頃から住宅地化したまちに、昭和60年頃からマンションや東横線沿いのアパートの建設で人口の急増した地域です。地形的な特性は、丘の上と、谷戸が刻まれた小地形のまとまりが連なるところにあります。鶴見の「丘のまち」の典型と言えます。

その寺尾地域の中で、今年の初め「寺尾のまちをつなぐ会」という会を、地域の人や施設に呼びかけて作りました。もう少し小規模な単位のまちとまちをつなぐとか、まちの中で福祉系の活動をしている人と国際交流系の人をつなぐとか、住民とコミュニティ施設と学校をつなぐとか、とにかく「つなぐ」ということばに託し、3ヶ月間に4回、連続懇談会をやりました。

区役所では区政推進課と、福祉保健センターができる前の地域福祉課、福祉保健サービス課、保健課が合同で、都市マス、まちぐるみ健康づくり事業、これから予定されている地域福祉計画の3つを絡めて入りました。事前の意見交換でイメージ合わせをしながら、地域の人の人選にもそれぞれがかかわっている人をあげました。

支えあい連絡会や自治会、また、区役所各課がかかわっている国際交流・福祉・子ども・青少年等のイベント実行委員会に声をかけた中から、中国系の方や子育て支援の人たちも参加してくれました。施設は地域ケアプラザ、地区センター、特別養護老人ホーム、地域活動ホーム、私立図書館等に呼びかけました。

都市マスのコミュニティづくりの考え方（図―1）を手がかりに、寺尾地域の地域別プランを配って、これまで地域の人と議論して出てきた課題や今後の方向性を紹介しました。これをさらに掘り下げ、地域のトータルなまちづくりを考えようとしましたが、具体的な実践を見守るコミュニティカンファレンスの実験的な試みになっているのではないかと思っています。

❷―新しい地域計画策定の考え方

【鈴木】　今の話との関連で言えば、福祉保健の分野だけでも、現時点で、計画と名のつくものが実にたくさん存在している。高齢者保健福祉計画、介護保険事業計画、これがわざわざご丁寧に別れて、別々にあるんですよね。それから子育て支援計画というものも持っている。そして区の段階でも、ゆめはま2010プランの区別計画があり、都市マスがあって、区社協の地域福祉活動計画や健康横浜21の区版を実施しようという動きまである。

そこに、区役所に地域福祉計画を区ごとにつくりたいんだという話を、私の前任者が去

表―1　中川・緑園・新橋地区（その2）〔中川地区（岡津、弥生台、西が岡、領家、桂坂）、緑園地区（緑園、池の谷）、新橋地区〕

		中川地区	緑園地区＊	新橋地区	（参考）泉区	備考
学校	小学校	2　岡津小、西が岡小	2　緑園西小、緑園東小	新橋小	17	
	中学校	2　岡津中、領家中			7	
	高校	岡津高			4	
	大学		フェリス女学院大学		1	
区民利用施設		中川地区センター 西が岡コミュニティハウス	緑園地域交流センター			
福祉関連資源	高齢者（介護施設）	老人福祉センター泉寿荘			1	
	特別養護老人ホーム	恒春ノ郷	希望苑 ショートステイセンター花の生活館	相生荘 新橋ホーム	8	
	老人保健施設	やよい台仁		阿久和鳳荘	4	
	その他		NPOだんだんの樹			
	児童　保育園	鳩の森愛の詩保育園		横浜ルンビニー保育園 鳩の森愛の詩あすなろ保育園	13	
	幼稚園	岡津幼稚園		やよい台幼稚園	14	
	保育室	YMCAチャイルドケアセンター アルク			9	
	放課後児童クラブ	3　岡津、領家学童クラブ、鳩の森愛の詩	そうてつ保育園GENKIDS緑園都市			
	障害者（知的障害） 地域作業所	岡津、ぴぐれっと3	ひかりの園	ぴぐれっと、ぴぐれっと2	8	
	グループホーム	サンハイム緑園都市	東やまた工房分場YOU		9	
単位自治会数		18	8	10	165	

年からしていたんですけれど、区長さんからの猛反発が出た。とんでもない、これ以上むだな計画づくりはやめてくれというわけです。

ただ、私どものほうで、今、考えている地域福祉計画は、地域の中で、屋上屋の話はもう極力やめて、これまでの地域に関連する計画がらみの話を一度整理した上で、まだ手をつけていない領域だけこの計画で策定しますよというようなスタイルにしたい。なおかつ進行管理もすべて市民との協働でやると、つまり、策定から実施から評価まで、一連の流れを市民と協働で行うシステムにしていく。

さらにアクションプラン的な性格を強くして、行政が果たす役割、市民が果たす役割というのを明記していく。そのときの行政が果たす役割というのは、お金を出したり、インフラを整備したりという役割になるわけですね。その時にだれも責任負いませんと言うのでは困るので、道路局や都市計画局なども含めて各局を集めたフォローシステムも形成していく。

それらのことを現実的に展開するために、私は、地区別計画をつくりたいと考えています。区別計画でさえ、区役所から反発を受けちゃっているんで、泥沼に入るような話なんだけれど、それが本来の姿じゃないか。今日の座談会の議論でも出ているように、対象地域の特徴がまちまちなのに、区で1本で何かこうしましょう、ああしましょうと言っても、ある意味で抽象度の高い計画になって、それを進行管理するだけではあまり意味がない。そうじゃなくて、この地域をどうしましょうという、かなり泥臭い話を計画化しちゃったほうがやっぱり地域福祉計画らしくなるのかなと考えています。そこで、着目しているのが支えあい連絡会なんですね。その大きな仕事として、地区別計画の策定や進行管理をしてもらえないだろうか。ただし、今の支えあい連絡会は、お年寄りの介護をどうするかということを軸に組み立てられているので、関係者も限定されてしまう。そこで、子育ての問題どうするんだとか、障害者の問題をどうするんだという話もできるメンバー構成に、変えていくことは必要だろうと思います。

【大塚】　今の鈴木さんのお話で言えば、地区別計画をこれから作っていくという時に、その地区で、地域福祉計画の地区別計画単独でも、都市マスの地区プラン単独でも、その両方でもいいですよ、という選択肢を、福祉局と都市計画局があらかじめジョイントして作り、区役所というか、地域の人に選ばせる。両方やるんだったら両局が一緒に支援するし、いや地域福祉計画だけでいいよと言えば、それに委ねる。選択肢の中に局際的な共同事業を用意しておいて、その気のあるところには選んでもらう仕組みを作る必要があるのではないのでしょうか。

僕が区役所にいたときの感じで、地域福祉計画の策定が区から反発された話ってすごくよくわかるんですよ。それは局から出てくる話に自由度が少なく感じられるからなんです。また区役所にも、局の言うとおりやらなきゃいけないという意識で受け止める人が多いんですね。僕はへそ曲がりだから、変えてもいいだろうという前提で局にものをいうのだけれど。そうじゃない人は、マニュアルが局から示されると、そのとおりやらなきゃいけないと思ってしまう。

地域の人は区役所の担当職員から話を聞いて、市役所が言っていることをはみ出しちゃいけないと、自らタガをはめる傾向がある。これは鶴見区の例ではないんですが、地域コーディネーターが支えあい連絡会の中に子育て関連の人を入れていいかと投げかけると、住民の委員の方で、区役所からはそういうふうには聞いていないがと心配されたらしい。高齢者福祉のためという原則をわきまえた上であれば、その地域の課題解決のために、多少アレンジしたってかまわないはず、というアドバイスをしたんですけれど。

局と区の関係がまだ、少し前の国と地方みたいなせいなのでしょうが、区として、局に対して対等意識を持つことが必要だと思います。

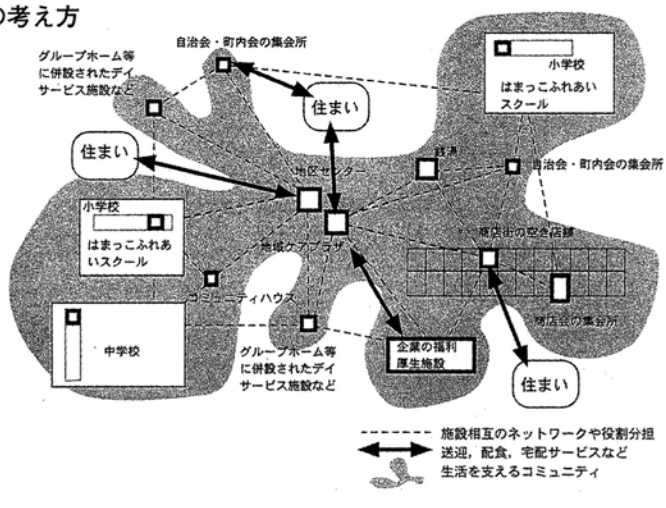
3　コーディネート型行政を支える コミュニティワーカー

【編集部】　今、大塚さんが言われたように、そういうことをコーディネートできる区役所の職員の資質とは、どういうものかということを話し合っていただきたいなと思うんですけれども。

【横山】　コーディネーターって何だろうか。文化人類学者の山口昌男さんが「あるとき中根先生に、「タテ社会でヨコを問題にするのは"はずれ"で、落ちこぼれのやることよ」と言われて、『じゃあ私は落ちこぼれの典型

図―1　コミュニティづくりの考え方

出典：鶴見のまちづくり
―横浜市都市計画マスタープラン
鶴見区プラン―
（平成14年5月）



として、ヨコの研究を続けます』とこたえたことがある。その後、石井進さんや網野善彦たちが『ヨコに自由に移動する民』に注目して、新しい日本中世史論を展開してきた。歴史は常に勝者の側から書かれる。勝者の記録を史料に、人々をタテ組織の支配体制に組み込んで理解するのが、"正統的"な研究としたら、そこからはみ出し、落ちこぼれる人たちを"正当"に評価することができないでしょう」と述べています。地域コーディネーターの活動とは、「落ちこぼれ」が地域で創造性を発揮することだと、私は考えています。地域で、ヨコ割りでどううまく、様々な主体をつなぐことができるかどうかということが試されているんじゃないかなと思います。

【編集部】　今号の冒頭の対談で、市長が、長野県の田中知事のように、タテ社会とぶつかる、利権の構造とぶつかる政治スタイルじゃなくて、僕は自発性を引き出すという、そういうポリシーで行きたいんだと言っているんです。それは、横浜には合っているなという気がします。そういう「引き出す」、あるいは「横につなぐ」ということを基本的にすごく重要な仕事の資質として認めるということがこれからの行政運営にとって重要になると思います。

【鈴木】　地域福祉計画の策定のための基本的考え方を定めようというので、今、議論を各委員の先生にお願いしているんですね。その中で、共通に皆さんの合意になったところは、コミュニティーワーカー制度みたいなものをつくって、地域を耕せる人材を育成するべきだという議論なんですよ。不思議なことに、市民活動推進委員会という、今、同時に市民局がやっている委員会のほうでも、同じ話題が出ているんですね。若干視点は違うんですけれども。こっちは福祉という視点でできているんだけれど、どちらもいわゆる市民活動を支援する、きちんと支援できる人材という、そういう視点で、似たような話が出てくる。

　実は、横浜市の行政職員の中に、そういう能力の非常に高い人が一定数いる。ところが今までそれが正当に評価されてこなかった。むしろ余計なことばかりやって、あいつはだめだと。遊びだとか、趣味でやっているのか知らないけれども、余計なことで外へ出ちゃったきり帰ってきやしない、そういうことを結構厳しく見られてしまう。そういう人事評価を改め、彼らの能力を位置づけ直して、コミュニティワーカー制度みたいなものを横浜市独自でもいいからつくったらどうかというのがある。国に要望してもなかなかつくらないだろうから。さらにそれは、福祉の分野だけとか、タテ割りの資格ではなくて、相互流通方式で、まちづくりなんかについても、同じ看板でできるようにする。

【内海】　横つなぎできる人だね。このコミュニティワーカーは、官民を問わないわけでしょう。

【鈴木】　それは、人を動かすことが上手な人やネットワークをつくることが上手な人、そういうコーディネート能力がある人だったら官民問わず、資格を与える。実績プラス研修みたいな形で認定する。その研修と認定は、横浜市大でやったらどうだろうという議論になっているわけですよ。せっかく公立の大学を持っているのだから、こういう点で連携しない手はないと。

　ただ、その資格に対して直ちに給与が発生するわけではない。地域社会では、一定の権能を発揮するが、有給であるかないかは問わない。

【内海】　市民の中にもコミュニティワーカー的なつなぎ役が必要になっていると思う。事実、市民活動が活発で、世の中の先陣を切っている地域には、必ずそういう人がいる。そういう人はいつもリーダーであり続けているのではなくて、意外とすっと後ろに引ける。ただひとたび、問題が起こると、「これは問題だ」というように提起をして、うまくそれを解決する方向に導く、あるいは担う人材を引き出して、それでその人を中心に物事が動く。そういう人材が登場してくるまで成熟してこないと、ほんとうの市民社会は来ないという感じがします。

　もう一方で、そういう市民層と一番やりとりするのは区役所なので、区役所の中にもそういう役割を持った人が大勢登場する必要があります。いろんな区民と直接やりとりしながら事業や施策を推進する区役所では、関連するセクションを横につなぎ、コーディネートする役割の人を育て、増やして行くことがますます大切になっています。

❶―現場感覚を大事にする

【横山】　その区役所のコミュニティワーカーにとって重要な資質が、現場感覚。私はいつも、職員に「現場、現場」と言っている。

内海　宏氏プロフィール

都市計画コンサルタント。大学卒業後、沖縄に渡って現地に事務所をつくり、沖縄の都市計画やまちづくりにのめり込む。その後、20年ぐらい前から故郷である横浜のまちづくりや都市計画に関わるようになり現在に至る。仕事の外にも、横浜市市民活動支援センターや泉区いきいき区民支援会議などの委員をつとめると共に、まちづくりの専門家集団「横浜プランナーズネットワーク」などに参加。家庭では、両親の介護にいそしむ他、PTA活動や町内会、NPO活動にも取り組む。
　今回の座談会は行政と住民を繋ぐ専門家の立場から出席。